
その扉を開けたとき

屋下雨宿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その扉を開けたとき

【Nコード】

N3370Y

【作者名】

屋下雨宿

【あらすじ】

大した捻りもなく、ストレートにドアノブを取って付けただけ

その日、私は彼氏と喧嘩別れをした。本当にしょうもない事だった。別れ話の『わ』の字も考えた事なかったのに、こんなことになるなんて思ってもみなかった。

私は家に帰ると、ご飯も食べずに部屋に籠る。携帯を見ても、やっぱり着信はない。

早く寝て忘れよう。

ベッドに転がる。うつ伏せになって、枕に頭を叩きつけた。何度も何度も叩きつけた。その内に疲れてきて、頭が痛くなって、目の前がグラグラしてきて、そのまま眠りに落ちていった。

＊

「起きて」

誰かの声がして、私の意識は現実呼び戻される。

「起きて。起きてくれ……」

何時間ぐらい眠ってたのだろうか？

寝惚けた瞳を焦点を合わせていく。目の前に白いスーツに青いシヤツ赤いネクタイが見えた。もう少し視線を上げると、白いシルクハットに片眼鏡。よく見ると、同じ年ぐらいで全く見覚えのない男

がいた。

「起きたかい？」

ここは自室。私は女子高生。じゃあ、こいつは？

「変態だああああああああ！」

私は大声を上げた。

＊

カーテンも閉め切られていて薄暗い部屋。薄暗いけど真っ暗ではない。カーテンの隙間からは微かに射し込む光が見える。そんな部屋に二人の男女がいた。女はベッドに座っていて、男は横から女の口を塞いでいた。

今の状況をまとめると、そんなところだろう。

どうでもいいが、やらしい展開ではないので勘違いしないでほしい。

「落ち着いたかい？」

それから数分後。男は冷や汗を流しながら尋ねてきた。私がコクコクと頷くと、男はやっと私を開放した。

「まだ夢の中ってことね」

「うーん。君が納得するならそれでもいいけど」

男は呆れた様子で乾いた笑い声をあげた。

「……で、私に何の用なの？」

「僕は君の願いを叶えに来たんだ」

「願い？」

「そうだよ。願い。君にもあるだろう？一つや二つは」

「あるけど……。何でいきなり？」

「うーん。気分かな？」

「胡散臭い」

「じゃあ、ものすごい負のオーラを感じたという事にしよう」

「陰気臭くて悪かったわね」

「そういうつもりじゃないんだけどな。謝るよ。それでだね。話だけでも聞いていくれないかな？」

「まるで宗教の売込みね」

「もう、何でもいいや」

男はお手上げという感じで片手をヒラヒラさせながら、もう片方の手で懷から何かを取り出す。

「とりあえず、これを」

そして、男は取り出した物を放る。私はそれを反射的に受け取ってしまった。

「何これ？」

「見ての通りだよ」

受け取った物を見てから首を傾げる。私の手の中にあるものをもう一度凝視する。真新しいステンレス製でレバーの付いている物体。

それは間違いなく……

「ドアノブ？」

「そうだね。でも、これはちょっと違う。どんな願いでも一つだけ叶えてくれる魔法の道具だ」

どうやら、男の話は宗教なんか比較にならないぐらい胡散臭いものようだ。でも、夢の中だしこんなものだろうと、私は心の中で納得する。

「一つだけ？ 願いを増やすとかは出来ないの？」

「どうだろう？ 出来ると思うなら、試してみればいいんじゃないかな？」

口元を隠して目を細める姿がとてもいやらしい。それを見て、捻くれた願いはやめておこうと決めた。

「使い方は？」

「これを握って願うと扉が変わる。開けた扉の先でその願いが叶うんだ」

話は軽く聞き流しながら、ドアノブをいろんな角度から眺めたり、軽く小突いたりしてみる。

「どんな願いでも？」

「どんな願いでも。君が望む自分。君が望む世界。どんなものでもOKだ。ただし、一度使ってしまうともう戻れないから、その点は注意してくれ」

「ふーん」

こんなもので仲直りできるのかなあ……なんて事を考えながら、今度はドアノブを膝の上で転がしてオモチャにしていた。すると、ちょっとした隙に男に取り上げられてしまう。

「あ」

「僕の話はちゃんと聞いていたかな？」

「うんうん。バッチリ」

「ならよかった」とでも言いたそうな笑みを見せる。

「それじゃあ、ここに付けておくよ」

「ちょ、ちょっと！そんなところに付けたらっ！」

取り付けられたのは、私の部屋の扉。男の持ってきたドアノブが、私の部屋のドアノブに吸い込まれて一体化していく。

「これじゃ、部屋から出られないじゃない！」

「はは……願いを叶えてしまえば部屋から出られるよ？」

逆に考えてほしかった。願いを叶えない限り私は部屋から出られない。

これを隠しておいて、いつか困った時に使うという名案を思い付いたのに！

「それじゃあ、僕は行くね」

「ちょっと待ちなさい！」

背を向けた男を捕まえようと飛び掛かる。だが、私の手は男の身体を捕まえる事は出来ずにすり抜けたのだ。

「え？きゃあああああ！」

そして、頭から床に落っこちた。さぞ豪快な音が家中に響き渡ったことだろう。

＊

「いたた……」

額を擦りながら身体を起こす。
振り返っても、部屋中を見渡しても、もう男はいなかった。

その時、軽い電子音の目覚ましが鳴り響く。手を伸ばしてそれを止めた。

時間は六時半。時計は見えてないけど、いつもの事なので時間は分かる。

夢……だったのかな？

カーテンを開けると、ベッドのある西側に向かって真っ直ぐ光が射し込んだ。もう一度部屋を見渡しても特に変わった事はない。いつも通りの朝だった。

顔を洗おうと、変わった様子など全く感じないドアノブを握る。

願い、夢……。うーん、何がいいかなあ。

扉を開けようとするが、やっぱり男に言われた事が気になって、なかなか踏ん切りがつかなかった。

あ、そーだ。何も考えずに開ければいいんだ。そうすれば、願いは叶えられないから、開けて大丈夫……かも？ 確証はないけど、試してみる価値あるんじゃない？

考えをまとめると、私は何も考えずにドアノブを取る。それから、ゆっくりと捻る。後は引くだけ。扉を開ける寸前。力を入れろ！ 倍プッシュだ！

もう目を開ければ、扉の向こうが隙間から見えるぐらいだろうか？

うーっ！ やっぱり駄目だ！ 無心なんて出来ないよ！

手を離すと、頭を抱えベッドに飛び込んだ。

でも今、ちょっとだけ開けた気がする。カチっという音も聞こえたし……なんて淡い期待と不安を抱えながら薄目になって振り返ってみる。残念ながら、扉は閉められたままだった。

大きく息を吐いて肩の力を抜くと、携帯電話の画面を見て時間を確認。まだ六時半過ぎ。学校まではまだ時間はある。

もう少し考えよう。そうしよう。

＊

「ねーちゃん！！」

ドアをノックする音で目を覚ます。いつの間にか二度寝してしま

っ
たらしい。

「ねーちゃん！」

「聞こえてる！何よ！」

これは弟の声。ベッドから降りると扉の方へふらふらと歩いてく。

「彼氏が来てるけど！」

「あー！先にいいなさいよ！」

反射的に返事をする、扉を開けて部屋を出た。

「あ！？」

そして、ドアノブの事を思い出す。

「どうかしたの？」

扉を開けてしまった！

でも、そこはいつもと何も変わらない光景。

今、私は何を願ったのだろうか？

一瞬前の出来事なのにサッパリ思い出せない。
むしろ、何も考えてなかったような気がする。

これって、さっきの私理論でいくとノーカンになるのだろうか？

私はすぐさま扉を閉めて、

世界一の美少女になれますように……

と、あまり興味のない事を願いながら、ゆっくりと扉を開ける。

「ねえ？ 私何か変わった？」

「は？ 頭、大丈夫？」

「うん。大丈夫。……で、何だっけ？」

「彼氏が来てるけど」

「何でそれを先に言わないのよ！ 行ってくる！」

「おい！ 待てよ！」

「何よ！？」

「頭ボサボサだし！ 着替えもしてないじゃないか！ そんな恰好で何処行くのさ！」

自分の姿を見てようやく気付いた。

「あー！」

まだ今日は一度も部屋を出ていない。それどころか、今起きたばかりだ。

普通はこんな事忘れないだろう。本当に頭が大丈夫じゃないかもしれない。

「何でもっと早くに言ってくれなかったの！？」

「今、来たばかりだし。僕に預言者になれとでも言うのかよ」

バタバタと慌ただしく家の中を駆け回り、ジャスト三分で準備完了。

今なら早着替え芸でも習得できそうな気分。

「いってきます！」

それから、私達はいつものように登校した。

何か忘れている気がするけど、それはどうせしょうもない事だろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3370y/>

その扉を開けたとき

2011年11月15日05時44分発行